昭和レトロの面影をたたえて

ーわが国陶磁器産業の中枢拠点、名古屋陶磁器会館ー

名古屋はわが国陶磁器産業の中心地であった。明治末から昭和期まで、全国でも1,2を争う陶磁器生産を誇り、特に輸出向け陶磁器では圧倒的なシェアを持ち、昭和期には名古屋港の輸出額のトップであった。

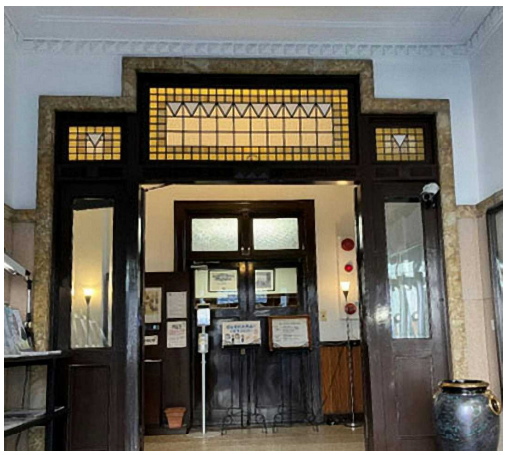
名古屋はその周辺地域に、多治見、瀬戸など陶磁器の生産地を控え、これらの地域で作られる素焼きの陶磁器に、絵付けを行なって完成品にして輸出していた。名古屋陶磁器会館の建つ東区白壁（しらかべ）町・橦木（しゅもく）町界隈には、全国から絵付け職人が集まり、絵付工場が次々と設立された。白素地の陶磁器輸送のため、1900（明治33）年には名古屋・多治見間の国鉄中央線がいち早く開通し、1906年には瀬戸・大曽根間の瀬戸自動鉄道（後の瀬戸電気鉄道）も開通している。

名古屋陶磁器会館

■名古屋陶磁器会館

名古屋陶磁器会館は、名古屋陶磁器業界の中枢拠点として、1932（昭和7）年11月、名古屋陶磁器貿易商工同業組合の事務所として建てられました。建物は鉄筋コンクリート造り3階建てで、当時は周辺の家屋を圧倒してそびえたち、その偉容を誇っていた。会館内には名古屋陶磁器上絵付工業組合や大日本陶磁器輸出組合なども入り、わが国陶磁器産業の中枢拠点となっていた。

建物の外壁は施釉スクラッチタイル貼りで、アール・デコ調のレリーフのある天井や建具などが残されており、昭和レトロの雰囲気をたたえている。1階奥にはノベルティー、陶磁器人形、オキュパイドジャパンマークを付した製品など、かつて名古屋から輸出された歴史的な輸出陶磁器が展示されている。裏庭には、建設に尽力した井元為三郎（井元産業）や、陶磁器業界で活躍した水野保一（瀬栄合資）の胸像も建っている。2008（平成20）年3月に、名古屋市の景観重要建造物等指定物件に指定され、同年10月には国の登録有形文化財にも登録され、名古屋の近代化の歩みを伝える「文化のみち」の拠点施設となっている。



名古屋陶磁器会館の玄関入り口（左）と輸出用陶磁器製品の展示ギャラリー（右）　　（浅野伸一）